

## 事業報告（生活支援員としての一年）

■これまで長い間、漁業を営む夫の手伝いと子育ての毎日で、明日は、当たり前のように来るものと信じて疑わない日々を送っていました。そんな平凡な毎日の中で突然襲われた東日本大震災。昨年3月11日に一瞬のうちに自宅まで波が押し寄せ、手足の震えが止まらない感覚を忘れることはできません。

■途方に暮れている中、生活支援員の募集が目にとまり、「何かできることがあるのであれば」という軽い気持ちで面接を受け研修の場に立ちました。研修が始まるやいなや「大変なところに来てしまった」と思いました。生活支援員は、仮設住宅の見回りやお話の相手をすればいいのだと思っていましたが、阪神淡路大震災の教訓を生かし「孤独死を防止する」「南三陸町の復旧復興を支える」等々、想像もしていないことを次々と話され、正直、責任の重さに「私には無理!」と思いました。しかし、講師は繰り返し、あなた方は「町の大切な財産」「これからの南三陸町を創っていく担い手」と言い続けました。現場に出てからは、そんな言葉を頭の中で反芻（はんすう）しながら、一軒いっけん仮設住宅の玄関をノックする毎日でした。

■訪問を始めた頃は、全く経験のないことで「いったいどうすればいいのだろうか」と、戸惑いと不安の連続でした。このような状態でめげて泣きつくたびに「泣いてもいいから、仮設住宅を廻り続けなさい」という言葉が帰って来ました。同時に、様々な事例を丁寧に解説してくれました。

■しかし、不思議と悩んで潰れてしまうことは有りませんでした。一つの困難な事例を乗り越えたとき、何かを学んで居ることに気づかされました。どのようにしたら乗り越えられるのかを一生懸命考え、それを乗り越えた時に新しい自分になっていると感じたのです。

■そしてなにより、私たちを支えてくれたのは、仮設住宅の皆さんの声でした。しばらく訪問の期間が空いていると「待っていたよ、どこかに行ってしまったかと寂しかった」等々、私たちの訪問を心待ちにしている方々の存在です。支援員と被災者という関係ではない、苦楽をともにする同じ町民同士という関わりが生まれてきている感じがします。

■ここまで来るのには、1年という長い時間と延べ24万5千回の仮設住宅訪問があったからだと思っています。「これ以上、尊い命を失いたくない」という言葉を意識しながら訪問し続けた結果、皆さんからいただいた言葉ではないかと思っています。

■四月に入ってから、これまでの毎戸訪問に加え「当たり前の暮らしを取り戻す」ことを支援の目標に掲げ、畑仕事や毎朝のラジオ体操等による日常生活の活動量を増やす為の支援、回覧板の復活やミニコミ誌を積極的に活用して地域生活の様子を伝える等、地元公民館と連携しながら仮設住宅から出た後の生活習慣を意識した支援を心がけています。

■まだまだ不自由な仮設住宅暮らしが続きます。これからの支援活動は、これまでとは異なる支援の在り方が求められる段階に来ていると感じています。今後も役場職員の皆さんの指導を受けながら、自立を支える支援の在り方を考え、毎日の訪問や仮設住宅団地での自治会活動を支援していきたいと思っています。

■最後に、私には夢があります。この壊滅的ともいえる町並みがいつの日が生まれ変わり、これまで以上に愛着の持てる南三陸町に発展するよう、ひとりの町民として長く携わっていくことです。この夢は、見るものではなく叶えるものとなるように、これからも日々学びながら進んでいきたいと思っています。

平成24年7月20日  
被災者生活支援センター  
主任生活支援員 三浦日和

《参考》1,328文字≒4分30秒